

旧ユーゴスラビアの国々を訪ねて

(スロベニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ)

旧ユーゴスラビアが解体して12年が過ぎた2005年8月、旧ユーゴスラビアの国々を写真撮影取材することになりました。私にとって旧ユーゴといえば、紛争・地雷・サラエボ冬季五輪、高校時代に世界史の授業で習った「7つの隣国、6つの共和国、5つの民族、4つの言語、3つの宗教、2つの文字で構成される1つの国」に示される、複雑な国という印象ぐらいの知識しかありませんでした。

出発前の事前勉強で、もともと旧ユーゴは、美しいアドリア海のビーチリゾートと美しい湖、中世の町並みと山間の渓谷など、見所の尽きない国であったが、戦争により多くのものが破壊されてしまったことを文献などで知りました。取材のテーマが「自然と歴史・そして平和」であったことから、どのような写真が撮影できるのかをイメージしながらも、少々不安な気分で出国までの日々を過ごしていました。

クラゲンフルトからバスにてスロベニアへ

成田からウィーンに飛び、さらにオーストリア南部の町であるクラゲンフルトへと飛びました。そこからバスに乗り込み、国境を越え旧ユーゴスラビア領内に入りました。途中国境付近のユリアンアルプスの絶景は、出発までの不安な気分を見事に吹き飛ばしてくれました。



写真1 リュブリャナ市街



写真2 リュブリャナ市街

スロベニアの首都リュブリャナは、古くからオスマン帝国やハプスブルク帝国の影響を受けて発展してきた美しい町でした。街のシンボル、リュブリャナ城から見下ろす旧市街は、赤瓦の屋根が折り重なり、中世ヨーロッパの落ち着いた町並みを想起させてくれます。ローマ時代の影響の残る壁や三本橋、ルネサンス様式・バロック様式の建物が立ち並ぶ市街地などの見学後、リュブリャナの南西にあるポストイナに向かいました。

スロベニアのカルスト地方は、カルスト地形の語源にもなっており、国内には鍾乳洞が数多くあります。今回は、総延長25km以上で世界2位の規模といわれるポストイナ鍾乳洞を見学しました。10万年ほど前から少しずつピフカ川の水を吸収し石灰岩が削られて形成されてきたとのこと。洞窟内には1mm成長するのに10年~30年かかる不思議な鍾乳石が林立していました。外気温が常に30度を超える中での鍾乳洞見学であり、鍾乳洞内部の涼しさはまさに別天地。「地下で天国気分」を満喫しました。

リュブリャナからイストラ半島へ

リュブリャナを後に、バスで一路南下し、イタリアのトリエステをかすめて一気にイストラ半島の西岸に向かいました。アドリア海に沿って半島を更に南下し、途中、半島の西岸に位置し、ローマ時代からイストラ半島の政治の中心で、世界遺産にも登録されているポレチュに立ち寄り。その日のうちに半島南端に位置するギリシア神話の伝説と遺跡が残る街プーラに到着。



写真3 プーラ市街地

プーラからイストラ半島東岸を北上、半島の付け根にあるクロアチア屈指のリゾート地オパティアを散策。すぐ東にあるクロアチア最大の貿易港リエーカを通過し、内陸部のプリトヴィツェ湖国立公園へ。200平方kmの広さを誇るこの公園は、1949年に国立公園に指定され1979年に世界遺産に登録されましたが、1991年クロアチア独立戦争の際に起きた紛争で、一時は「危機にさらされている世界遺産リスト」に登録され、緊急保護措置が必要な状態にまでなりました。しかし、現在は幻想的で美しい湖群の姿を取り戻し、危機遺産リストからも除外され、ヨーロッパ諸国から観光客が訪れる美しい観光地となりました。公園内を歩いて散策し、その雰囲気を楽しみました。アドリア海岸の強い日差しに少々参っていた体には束の間の休息となりました。



写真4 オパティア



写真5 プリトヴィツェ湖国立公園

要塞都市トロギールからさらにアドリア海を南下

幻想的で清涼感あふれる国立公園を後に、再び激しい日差しアドリア海沿岸へ。ドゥブロヴニクへ向かい南下を続けます。

途中、海岸沿いに点在する都市をめぐるていきました。

トロギールは、周りを城壁に囲まれた小さな島で、町の起源はギリシア時代までさかのぼり、狭い島内にはさまざまな時代にわたる教会や歴史的建造物がひしめいていました。1997年に世界遺産に登録されています。

スプリットは、古代都市が残る神秘的な町で、アドリア海沿岸最大の都市。旧市街の中心には貴重なローマ遺跡があり、やはり1979年に世界遺産に登録されています。

このあたりは、ローマの影響と共に、東方イスラム圏からの影響も強く感じられるようになってきます。



写真6 スプリット

“アドリア海の真珠” ドゥブロヴニクへ

今回の旅行の目玉の一つでもあるドゥブロヴニクに着いたのは、昼過ぎの3時頃。真夏の日差しが容赦なく照りつける中での到着でした。

クロアチアの最南端に位置する、アドリア海沿岸の小さな町ドゥブロヴニクは、“アドリア海の真珠”と呼ばれるクロアチアきっての観光地。15～16世紀にはヴェネツィアと並ぶ貿易都市として栄え、今も旧市街には当時の面影が残っています。旧市街は、オレンジ色の瓦屋根の家々が並び、8～16世紀に増改築を繰り返して建造された城壁で囲まれており、1979年に世界遺産に登録されています。内戦による建築物の被害もすべて修復され、現在は、ヨーロッパ各国から観光客が集まっています。



写真7 ドゥブロヴニク



写真8 ドゥブロヴニク

モスタル経由サラエボへ

ドゥブロヴニクを後に、アドリア海を少々北上し、ネレトバ川に沿って内陸へ向かってバスは進んでいきます。

途中、世界遺産の街モスタルへ。モスタルとはボスニア語で“橋の守人”という意味で、その名の通り、スタリ・モスト(古い橋の意味)とよばれるアーチ型の美しい橋を中心に発展してきた街です。この街は、オスマントルコ領時代に作られ、ネレトバ川を挟んでムスリム人とクロアチア人が分かれて住んでいますが、旅行者はどちらの居住地にも自由に行き来ができます。街の象徴であるスタリ・モストは1993年11月に内戦により破壊されてしまいましたが、ユネスコの協力のもと、復興の象徴として2004年に復元され、橋とその周辺は、2005年に世界遺産に登録されました。



写真9 モスタル周辺



写真10 モスタルの石橋

旧ユーゴの旅の最終目的地であるサラエボには、夕刻に到着しました。街には、日本のODAで贈られた路線バスも走っており、人通りも多く、内戦後の復興はかなり進んでいると感じられました。建物には銃痕がはっきりと残っており、数年前まで激しい戦闘が行われていた様子を感じ取ることができます。市街地の中心に向かう広い道路は、内戦中「スナイパー通り」と呼ばれ、動くものはすべて狙い打ちにされたそうです。

サラエボは、元々、様々な民族・宗教・文化が混じり合っていた都市であり、現在も、カトリック・正教会・イスラム・ユダヤの各寺院が市街地の中に並び立っています。旧市街地の中心街バシチャルシアには、トルコ料理店、トルコ食器などを扱う店が建ち並び、あらためて、旧ユーゴの複雑な歴史的背景を垣間見ることができました。

サラエボ五輪施設の内戦犠牲者の墓地、1914年サラエボ事件の現場など市内をめぐり、内戦による傷跡の早期復興を祈りつつ、サラエボを後にしました。



写真11 冬季五輪施設の墓地



写真 1 2 サラエボ事件現場

写真撮影旅行を終えて

この写真撮影では、旧ユーゴの内3カ国を巡りましたが、今でも内戦の傷跡は至る所に残されています。しかしながら、モスタルの橋の修復や、ドゥブロヴニクの復興の様子を目の当たりにし、また、西ヨーロッパ諸国から多くの観光客が訪れている様子からも、美しい自然と奥深い文化に彩られた素晴らしい観光地としての復活を充分に感じ取ることができました。近年は、日本からの観光客も増加傾向にあるということですが、「自然と歴史・そして平和」を体感できる旧ユーゴの旅は、自信をもっておすすめすることができます。

(H.T)